最終更新日：2023年2月20日

学校教育講座　粕谷 圭佑 准教授

学校での社会化と相互行為の研究

キーワード　社会化/　相互行為/　エスノメソドロジー

どのような研究をなぜ行っているか

社会化：人間は、自らの存在に先立つ集団のなかで生まれます。だから、家庭・学校・仲間集団・職場のような、社会のさまざまな集団の一員となることと関わらないことはありえません。社会学では、集団の一員になる過程を「社会化（socialization）」と呼んできました。社会化がどのような過程であるかを探求することは、社会的存在である人間を探求することにほかなりません。この大きな問いに対し、私は、教育場面での相互行為の分析を通して、記述と発見を積み上げていく研究を行っています。

相互行為：学校において子どもは、授業を聞く姿勢をとる、質問に対して挙手をして発言する、合図で整列をするなどといった、家庭にはない特有の相互行為（interaction）をすることが求められます。こうした学校特有の相互行為は、集団教育の画一性を象徴するものとして非難されることもあります。しかし、多様な生活史を持つ子どもたちに、一斉に授業を行う形式を採る現在の学校教育では、このようなやりとりの形式が教育活動を可能にしているとも言えるでしょう。こうした学校的相互行為の学習は、子どもにとっての課題であると同時に、教師にとっての課題でもあります。「小1プロブレム」や「指導力不足」などといった教育問題は、まさにこの課題に関する困難を指し示しています。以上のようなわけで、学校での集団の一員になること（学校的社会化）は、学校的相互行為の学習と関わっています。ここから、①学校に特有の相互行為とはどのようなものなのか、②教師はその相互行為のやり方をどのように教えるのか、③子どもはその相互行為のやりかたをどのように学ぶのか、という三点を、明らかにする価値のある研究課題として設定できます。

エスノメソドロジー：以上のような研究課題に対して、私は、可能な限り実践そのものから経験的にアプローチしたいと考えています。そのためには、その瞬間瞬間のやりとりに参与している教師や子ども自身が実際にやっていることを観察し、そこで示されている実践の論理を記述していく作業が必要となります。教育実践の場は、研究者が入る前から、すでに秩序がありますから、研究者の仕事は、実践から離れた理論を現場にあてがうことではなく、現場の秩序を精緻に記述する技法を磨きあげ、実際に記述してみることにあるでしょう。これは社会学のエスノメソドロジー（ethno人々のmethodology方法論）という研究方針と重なるものです。

以上が私の主な研究関心と研究方針です。現在は、とくに学校教育の初期場面として、幼稚園年少児がはじめて園内の生活を教えられる場面の映像に焦点化して分析を行っています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

学校内のさまざまな教育活動の方法論は、教育実践系の書籍などでもよく論じられています。そこでは、よく力量豊かな教員によって、自らの経験から得られた「コツ」や「心構え」が語られます。もちろんこうした情報は有益なものです。ただ一方で、「コツ」「心構え」では描かれきれないものもあります。私が着目する、教育場面の「やりとり（相互行為）の組み立てられ方」もその一つです。教師がときに感覚的に行っている実践を解剖し、その仕組みを明らかにしていく作業は、実践者にとって実践を振り返る視点を提供するでしょうし、実践者の優れた感覚を共有する手段にもなるはずです。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

令和4年度　奈良県教育委員会教育職員免許法認定講習（教育社会学）
令和4年度　奈良県立生駒高校進路相談会模擬授業講師（教育社会学）

奈良教育大学　教育研究支援課 学術研究推進係 0742-27-9135　g-kenkyu@nara-edu.ac.jp